

【海外学会報告】

国際フランコフォニー学会 第38回世界大会参加報告 Conseil International d'Études Francophones (CIÉF) 38^e congrès mondial, 24-28 juin, Moncton, Canada

2024年6月24日(月)から同28日(金)まで、カナダ・ニューブランズウィック州のモンクトンで国際フランコフォニー学会(CIÉF)第38回世界大会が開催された。全体のテーマとして「他者性の諸形式(Déclinaisons de l'altérité)」が掲げられ、37のセッションに分かれて110件の研究発表があった。そのほかアカデミの詩人たちによる他者性の形象に関する討論会や、カナダのフランス語圏作家たちによるマイノリティとして書くことについての討論会、そして水曜午後には作家たちに描かれたモンクトンの街をめぐる文学散歩などもあった。以下、AJEQから参加した5名の会員の発表を中心に報告する。

まず、大会2日目の25日に行われた「Pratique et développement pédagogiques」のセッションにおいて、小松祐子会員が「Apprendre et enseigner le français à l'ère de l'intelligence artificielle」というタイトルで発表を行った。発表前半ではフランス語専門文献の自動翻訳結果を学生に検討をさせた授業内実践の結果を報告した。後半では、CEFR(欧州言語共通参照枠)(2001)が提唱する行動中心の考え方と「OECD:教育とスキルの未来2030プロジェクト」(2015)が謳うコンピテンシー概念とに依拠し、知識やスキルにとどまらない能力・資質開発の重要性を論じた。

3日目の26日には、「Quand le propre cohabite avec l'étranger : bilinguisme et traduction (2)」のセッションで真田桂子会員が「La poésie de la traduction dans *Transfiguration* sous forme de « renga » japonais chez J. Brault et E. D. Blodgett」と題した発表を行った。かねてより研究しているケベックを代表する詩人J. Braultとカナダ英語圏の著名な詩人E. D. Blodgettが日本の「連歌」の形式に則り、フランス語と英語でそれぞれの短詩を翻訳し合い、豊かで陰影に富む独自の境地を切り拓いた詩画集『変容』について報告した。

さらに、大会最終日の28日には、Gilles Dupuis会員が司会を務めるセッ

ション « Expressions de l'altérité chez Kim Thúy et Ying Chen » があり、まず関未玲会員が « L'expérience de la migration et son influence sur l'écriture de Kim Thúy » というタイトルの発表を行った。10歳のときにカナダに移民したキム・チュイの小説では、他者性の問題が言語習得の過程を通して浮き彫りにされている。母語での自己表現が確立する以前に第二言語となるフランス語を習得することになった作家にとって、「他者」の言葉であり続けた両言語と向き合うことは、自らを「他者」化すると同時に両者の「他者性」を相対化させる機会ともなっていることを明らかにした。

その後、Dupuis 会員が « Nouvelles figures d'altérité dans l'œuvre de Ying Chen » と題する発表を行い、チェンの13作目にあたる『傷』以降の新しい小説シリーズにおける「歴史」の取り込みについて論じた。そこでは主要人物は亡霊や生死の境をさまよう者で、直接・間接的に歴史上の人物から想を得た者たちである。そこから、チェンにおける「他者」の描き方の微妙な変化と、世界を揺るがす重要な問題にたいしてフィクションに仮託して著者自身の意見を述べる手法を明らかにした。

そして、最終セッション « Littérature et cinéma autochtones » では、小倉和子会員が « Terres, mémoires et langues : quelques réflexions sur *Shuni* de Naomi Fontaine » と題する発表を行い、現在のケベックにおいて先住民文学を牽引する若手作家 Naomi Fontaine が2021年に発表した標題作を取り上げた。長い書簡の形式をとった本作の中で話者が語りかける相手である白人の幼なじみ Julie (イヌー語で Shuni) は、じつはかぎりなく話者自身に近い存在であること、話者は都会育ちの自分に欠けているイヌーの伝統 (土地の記憶や言葉) をエクリチュールを通して再構築し、Julie と共有しようとしていることを指摘し、フランス語で書くことによる自己の相対化と、他者との和解における文学の可能性を考察した。

すべての分科会の終了後、ユトレヒト条約に関する映画 *Les Sceaux d'Utrecht* が上映された。先住民の血を引くラッパーの Samian (Samuel Tremblay) が各地を訪れてインタビューしたドキュメンタリーで、モンクトン出身の監督 Paul Bossé によって2014年に制作されたものだが、監督自身の解説を交えての上映だった。アカディが英国に譲渡された1713年のこの条約の締結に際して、先住民は完全に蚊帳の外だった。映画は先住民の側からその後の世界を見直したもので、白人による土地や資源の開発に翻弄され、4

回も保留地を移転させられた先住民が今は静かに暮らすアピティビ湖のほとりの風景が印象的だった。

ニューブランズウィック州はカナダで唯一、州レベルでも英仏2言語を公用語としている。中でもモンクトンは州都のフレデリクトンと比べてもフランス語系住民が多い都市である。今回はダウンタウンから2kmほどのところにあるモンクトン大学（ケベック州外のフランス語の大学としては最大）を会場として大会が行われた。メイン会場となった建物の同じ階には、偶然にも、日ケ交流40周年のときに『遠くて近いケベック』で小松会員がインタビューした Jean-François Bisson 教授（物理・天文学科）の研究室もあり、旧交を温める機会となった。その他、昨年とは異なり、今回は韓国からの参加者はいなかったが、北米大陸での開催ということもあり、カナダ人や米国の大学で教えるフランス人の参加が多かった。朝食や昼食を共にしながら、同席した参加者たちと研究やそれ以外の四方山話ができる対面開催のありがたみを実感した。

また、いつも刈りたての芝生の匂いがかぐわしい北米らしい広いキャンパスの中にはアカディ博物館もあり、1755～63年の「強制移住」を説明するパネルや、今なお世界中の人々の心を打ち続けている『エヴァンジェリヌ』の物語や映画のさまざまなヴァージョンなど、貴重な展示物も多く、アカディの歴史の生々しい断片に触れることができた。モンクトンは世界でもっとも干満の激しいファンディ湾の奥に位置していて、海風が強く、天候も変わりやすい。街中を流れるプチコディアック川に、満潮時に湾から逆流してくる海嘯（mascaret）が残した跡を眺めながら、ケベック州とはまったく違うフランス語圏の風土と歴史を垣間見ることができた。かつて、この海から15000人以上のアカディアンが強制的に船に乗せられて南のアメリカ植民地やフランス、さらにはイギリスにまで運ばれたことを思うと、「アカディアンはつねに〈他者〉であり、流謫の身だった。いつも〈ここ〉ではなく〈よそ〉に根づくようとしてカメレオンのように人格を変えるが、根づくことは容易ではなかった。文学はその複雑な心境を表現するために自分たちが獲得した自由なのだ」という、アカディアンの詩人たちによる討論会での発言が多少なりとも理解できたような気がした。

モンクトンから『赤毛のアン』の故郷であるプリンスエドワード島まではバスを乗り継いで3時間ほどで行けるらしい。学期中でなければ…と残念な思いに駆られつつ、翌週からの授業にそなえて午前3時起きで帰路についた

強行軍の出張だった。

来年の大会は南アフリカ共和国のケープタウンで « Circulation(s) » を主要テーマにして開催されることが決定している。

(小倉和子・小松祐子・真田桂子・関未玲・Gilles DUPUIS)